

32
□常務若津政大夫 (室曆九氣) 實政一

天明七年九月桐座に二代目文字大夫の控として番附に出が、次を
實政元年四月河原崎座に文字大夫のナカレを諱うとて、其座
出勤なりしが、實政三年河原崎座に才太夫のワキ、同五年二月
中村座に二代目兼太夫のワキと勤め、造酒大夫の死後、宗元の正十を
とり、實政六年十一月河原崎座にて始めをワキに出す。 (常) 實政
九年正月御座にワキを諱うとなす、而して實政十年十一月森田座
勤見右番附に政大夫改め、右左文字大夫とて、兼太夫と同格
に記載ありしが、同五年再び政大夫の名にのぞく、實政十一年
綱太夫等とて、座に從い、甲州に巡察中十月十三日死歿す。
享年四十七、深川の任に

33
□常務若津出雲大夫

實政三年十一月河原崎座に二代目兼太夫のナカレを諱う。
後年文賀となす。

34
□常務若津常船若太夫

實政三年春河原崎座に才太夫のナカレ、實政六年同十一月河原崎
座に文字大夫のナカレ、爾後兩三回出勤あり。

35
□常務若津組太夫

實政六年五月桐座に二代目兼太夫のナカレに出勤ありし外、其座出
勤ありし。

□常磐石津伊勢大夫

始の繁大夫、後二代目大和太夫

後太夫の弟子にて天明六年二十ニ才にて繁大夫となり後伊勢大夫と改名天明七年四月中村座に初め七控に當り、寛政六年五月相座に二代目兼太夫のワキを勤め、後同人に從て芝居出勤あり、寛政十年十一月中村座にて家元のワキに昇進す、二代目兼太夫吾妻の一派を起すや共に走り、寛政十二年正月中村座に二代目吾妻大和太夫と改稱ワキ役を勤めしか、享和二年國太夫の死すも左名長内等以常磐石津に後歸して伊勢太夫の旧稱に成り同年十月申付自ハワキを請ふ、當時二代目の遣兒末は弱冠ありけし綱太夫喜代太夫等と共に補佐文化三年頃まで太夫場を勤め文化四年十一月河原崎座より小文字太夫十ニ才にて出勤するに及いその補佐となり文化五年十一月以後芝居出勤なし、後文枝となる

□常磐石津越太夫

寛政六年中、芳太夫、二代目兼太夫のワキを勤めし以後兼太夫に從て數度芝居出勤あり

□三代目常磐石津造酒太夫

始の淀太夫、次いで二代目出雲太夫

寛政六年十一月河原崎座に二代目文字太夫ナカレシ出演(文化十三年筆記の常磐石津年表に、始り淀太夫と稱し、寛政六年八月出雲太夫と改めたりとあるは、寛政三年十一月河原崎座番附に記載の出雲太夫は先代なるべし)其の後二代目兼太夫伊勢太夫のワキ或いはナカレシと出勤し、享和二年十一月三代目造酒太夫となり(中村座筆記)伊勢太夫のワキを請ふに其の後絶てて出勤す文化十一年二月森田座に小文字太夫のワキを勤めし、以後末出勤す、文政元年には喜美太夫か遊木

大夫を子より養育するに文化の末年死去せしなり
文化十一年吉原細見に常磐津造酒大夫の名あり

□二代目常磐津左名大夫

寛政八年正月御座に二代目文字大夫のナカレに始りて出勤(常)後かく
綱大夫伊勢大夫のワキナカレとて出演、寛政の末年死す品川に住す

□三代目常磐津兼大夫

始り初代綱大夫

(宝暦十一文化十)

初め綱大夫と称し始りて芝居に出勤せり寛政十年九月中村屋興行
二代目文字大夫のナカレを語る、同年十月同座に同じくワキ、十一年三代目
文字大夫歿す、その翌年八月に小供芝居辰松座の夕テ、同じく
十一月に始りて大夫場となり(年四丁キ)伊勢大夫、長代大夫等と
共に遣兒小文字大夫の後見となりて夕テ語りてと各劇場に出勤
文化十一年十月五日に兼大夫となり、十一月中村屋に辰松座の夕テとして出演中
小文字大夫のワキを語る、その後しばらく夕テとして中村屋に
出演あり文化十一年六月中村屋に辰松座の夕テとして出演中
七月二十七日享年五十四にて終る、伝之て云ふ所則芝居の錦路
カニを食ふとその中毒にて死したるなりと、本芝居に任せし世は此を
本芝居の兼大夫と称す、斯道の名人に常磐津の古曲は大抵この
人の改訂を経たりと云う、「都の錦」の記よりいよれば、その語りは
俵下り一もの如く上りる語り崩せし文化の始り本芝居兼大夫
云々となり、法名常春院兼喜日香信士、麻布本村町本光寺に
葬す、江ノ本兼に生れ江ノ原兼前者と云う魚賣りなり、二代目
兼大夫の弟子となり更に文字大夫に傳う、まづその兼大夫と云ふ